青春の記録1／あしたの墓碑銘／戦争と人

青春の記録 1

めしたの墓碑銘

戦争と人間

編・解説　安田　武

三一書房

青春の記録 1 あしたの墓碑銘 編者 安田 武

一九六七年八月二十八日 第一版発行 定価 四六〇円

発行者 竹村 一

印刷所 同興印刷株式会社

製本所 有限会社 佐伯製本所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一)三一三一～五番

振替東京八四一六〇番

あしたの墓碑銘——戦争と人間　目次

Ⅰ　ペンをすてて　6
きけわだつみのこえ　わだつみ会編
雲ながるる果てに　白鷗遺族会編
あゝ同期の桜　十四期会編
地のさざめごと　旧制静高遺稿集

Ⅱ　愛と離別と死と　108
村の戦中日記　110　渡辺清
わがいのち月明に燃ゆ　139　林尹夫
くちなしの花　159　宅島徳光
陣中手記・遺稿　171　太田慶一
陸軍学徒兵の手記　192　松永茂雄
戦艦大和の最期　203　吉田満

Ⅲ　さまざまな戦争体験　230
沖縄戦従軍記　232　楠政子

原爆体験記 245 土井貞子
益　信之 250
中前妙子 255
戦争と私 263 生田テル
藤川渓子 265
二瓶万代子 268
主婦の戦争体験記 271 影山　文
八月十五日と私 276 伊藤賀代
森　歌子 282
森川絹子 287

Ⅳ 日清・日露・シベリア出兵 292
愛弟通信 294 国木田独歩
第二軍従征日記 308 田山花袋
軍隊日記 315 黒島伝治

解　説 323 安田　武

コラム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

進め悠久大義の道　東条英機　29
学徒総動員体制の実施　44
泥濘　田辺利宏　71
出撃を前にして詠う　古川正崇　78
学校教練教授要目　98
学生義勇軍の北海道開拓　115
旧制中学の生徒心得　131
酔後　野崎文太郎　146
戦塵にまみれて　小津豪男　154
戦闘歌集　渡辺直己　168
川柳合作　176
遺書　大野幸吉　187
戦陣訓　198
骨のうたう　竹内浩三　238
原爆の記憶　竹西寛子　256
学童疎開はじまる　272
若い世代の発言　丸山邦男　276
八月十五日について　奥野健男　284
日露戦争の手紙　宮下秋蔵　302

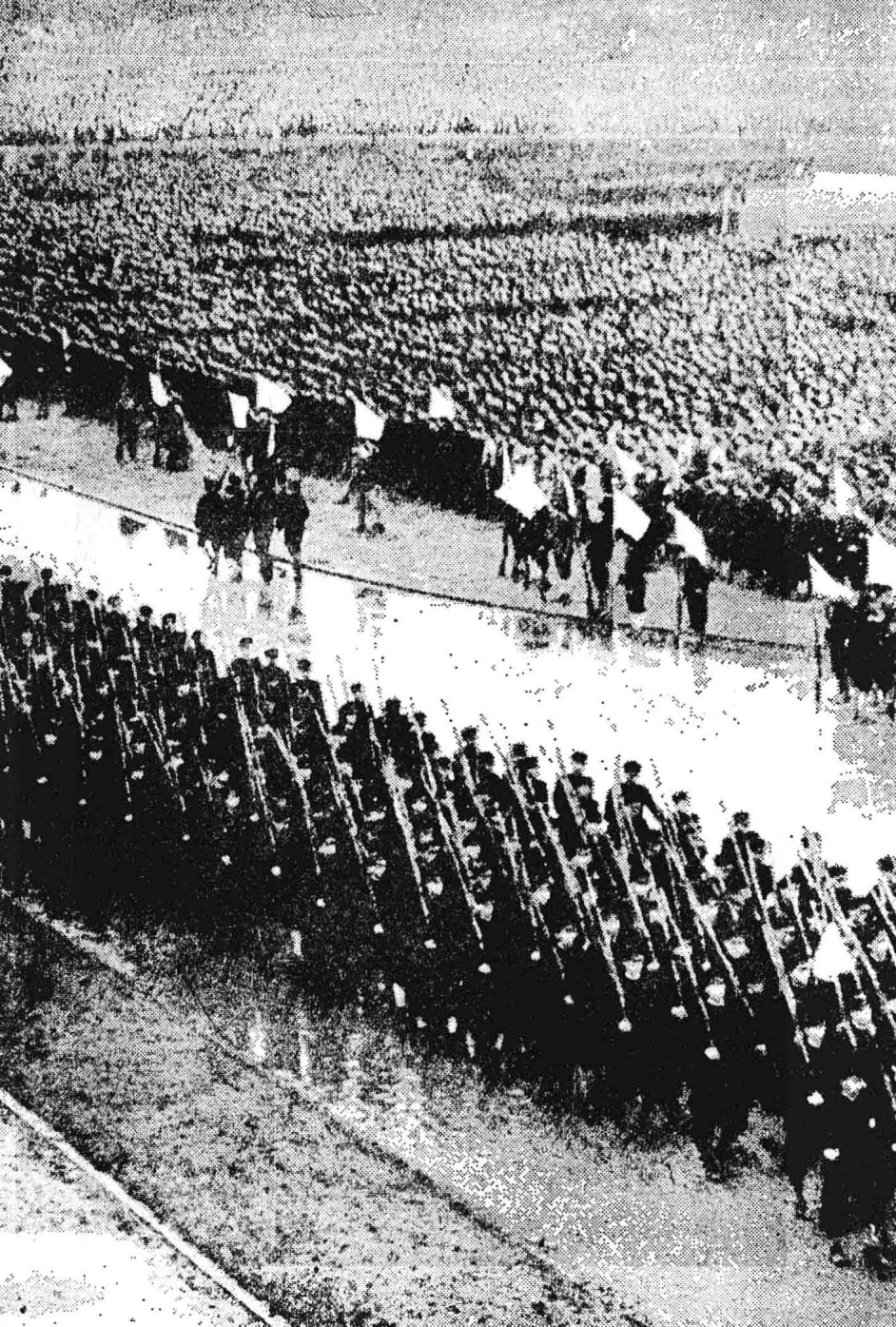
青春の記録1

あしたの墓碑銘——戦争と人間

I

ペンをすてて

きけわだつみのこえ
雲ながるる果てに
あゝ同期の桜
地のさざめごと



きけわだつみのこえ
雲ながるる果てに
あゝ同期の桜
地のさざめごと

『きけわだつみのこえ』は、東大生協内に設けられた編集委員会が、全国的に戦没学生の手記を公募してできたものである。昭和二十四年のことであった。

『雲ながるる果てに』は、それから二年後の二十六年、第十三期海軍飛行予備学生の遺族、生き残りの人たちで組織されている白鷗会が、同期の戦没学生を主に、その遺稿を編集したものである。

『あゝ同期の桜』は、第十四期予備学生による戦没学生遺稿集で、昭和四十一年になって刊行された。

『地のさざめごと』は、旧制静岡高等学校卒業生戦没者の遺稿集で、おなじく四十一年に上梓されたものだが、非売品で市販はされていない。

これら四つの遺稿集には、同一人物の手記が、それぞれ部分的に収録されている場合が少なくないので、本書の編集に当たって、同一人のものは、全部一まとめにして収録することにした。これには、非売品として上梓された『別冊あゝ同期の桜』および『戦没学生の遺書に見る15年戦争』として公刊された『きけわだつみのこえ第二集』も含まれている。

篠崎二郎（しのざき じろう）

同志社大学文学部英文学科卒業。昭和十三年入営。十五年五月中シナよりかえり応召解除。十六年八月再度応召。十九年一月東部ニューギニヤにて戦死。三十四歳。

昭和十三年九月二十五日

今日までの妻よりの便りを総合して小生の気になりながらほのあたたかく待っていた事実の結末を見る。妻の身体に異常のなかったことだ。征（ゆ）ける身われの二つとなき自己を、この魂を、永久に存続してくれる我が子をまだ持ち得ない身であるということを。内地より一足早く大陸の冷えはおとずれ、すっかり秋となり、アンペラのままでは少し寒いくらいのこの夜を、一人そんなことを考え、寂しく寝られぬ感傷の夜を過ごす。

昭和十四年三月十五日付（寿子（ひさこ）夫人あて書簡）

復興都市N市も相変わらず潜入分子活動し、全市は悪化しつつあるようだ。上海（シャンハイ）のテロ化と相通じて。

当市と相対応して、近郊の守備地区も大討伐をやっている。今日は不幸なニュースを書かねばならぬ。というのは武村（たけむら）隊（上陸当時属していた中隊）は、市より十五里東方の山中の部落にいるが、とつぜん敵主力と衝突、ただちに討伐に移ったところ、二日三晩の追撃戦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に多数の行方不明と戦死を聞いたが、本部への確報により、中隊だけでも二十名と判明、思わず黙禱を捧げた。他の中隊でも相当出して、あの大隊は再起不能に陥っているそうだ。朝夕仏前にどうか英霊をとむらってやってください。同じ征衣の身、万感こもごも哀悼の一日を送りつつ、自分は本部にこんなでいいのだろうか、すまないすまない。戦友の悲しみ、戦争の悲劇をまざまざ体験し、苦しききわみ、しかあれどただ小生は今、しずかに思い本部要員としての責務をしじに感じる。歯をくいしばり情報事務に一意奔走するつもりだ。今夜は月の美しい夜だ。征旅の身に、戦友の不幸、自分は！　もし！　妻はどうなるだろう……生涯自分の妻であってほしい、永遠に。ひとりよがりかなあ——。月にものを言ったんだよ、失礼。

昭和十七年師走付（寿子夫人あて書簡）

戦況日々に激しい南の戦線に出ることとなる。もとより待機していた身には当然かも知れぬが、直面してみればやはり征衣の凡々兵である。否、凡人以下の人間である。目をつぶってみる。頭に浮かぶものは愛らしい子供、妻、父、母、妹等々。門出の前夜「私を未亡人にしてはいや。」と言ったきみの顔が、目が、忘れられない。人間二郎として篠崎二郎家を建設し、所期の目的にまで盛り上げる熱と決意を持ちながら、今征衣の身だ。しかし何時もきみの全部は心に銘じている。何か機あるごと、常に頭に浮かぶのがきみの全部です。あれもしたい、あれもせねばならぬ。あれだけはしたい、あんなことはもっとしたいと、なかなか希望多く、理想高く、きみ以上に生に対し、人生に対し、欲張りかも知れぬ。長年積んで来た浅いながらのこの学識と、きずき上げた人格をもって、自分の力相応に社会的に思う存分ふるまって何かの形の役立ちを見なければ生まれて来たかいのなき苦しみを、しみじみ感じては凝然としておれないのだ。

しかし、今きびしい戦いに純粋な国家への思いをのみ盛った征衣へのおあずけだ。生死の運命と共に。

凡情とたたかい愛国の心にと清められた我が心は、ここまで高められてきたのだ。さまざまの心の苦しみとたたかい、結局心を欺瞞したのだろうか。否そう思いたくはない。いっさいの心の葛藤に打ち克ち、素直に愛国の誠だと考えたい。

ただきみに願っておくことは、我が生死の問題を超越して常にきみが結婚当初の感激に生き、心身共に理知美と健康美に生きていってくれることのみです。数数の思い出を心に育くむことにより、生ありかえれる

日が来れば、その時新たな感激こそ我が生涯通じての極みだと思う。前のシナ事変の際より、もっともっと深みのあるものと思っている。留守居の安泰を祈ることは結局きみと愛児の無事を祈ることであり、きみと克子とへの愛着である。もちろん自分をかくあらしめてくれた両親へのかぎりなき感謝は別として。

広いこの世界にきみという好伴侶者を持ち、克子といういとし子を持ち得たことは、自分の最も幸福なことである。きみは何時もいうように、常識家で、健康で、美人だからという簡単なものではない。自分の理想の一端を受け持った性質は、自分の理想に向かって思うように妻教育に同化されてくれた大切な我が心の太陽である。すなわちそうしてでき上がりつつあるきみの容貌、性格、気質などのすべてが何よりも美しく感じ、好きなんだ。おそらく世界中に無比なものに見えて仕方がないのだ。ほとんど応召生活により別居をやむなくされてはいるが、きみのそばには克子があり、その成育を見る一方、苦しいこと、辛いこと、困ることもあろうが、しっかりとしてくれるように。

生命への自信をもって南へ征くつもりだ。どうか現在のきみのままで良い。そのままの精神と健康がほしい。静かな中に情熱に生き、情熱の中に静かな性質の持主であってほしい。きみの顔が浮かぶ。情熱的な黒目がちの目、きりっとした中にも愛くるしいまで引きしまった口、ふくよかな胸のあたり、きみのまぼろしが浮かんで消えない。

ああ！　めめしい気持を去らねばならぬ。

後顧の憂いさらになし。身体の調子も至極順調、一意待機任務の任を終え、命に依り椰子茂る方面に出ることとなったこと、全く男子の本懐、御召しとあらば、皇軍の一人として誓って恥じざる覚悟にいる。苦しい覚悟に。

すべて時の流れに、運命に委せ征く。

任運無作！　父のよく言った言葉だった。

国力を疑うことなくひたむきに、この大みいくさ捷ちがため征く一人としての任務に、強く征くこととする。

中村徳郎　東大理学部地理学科学生。昭和十七年十月入営。十九年六月比島方面に向かい以後行方不明。二十五歳

（出征の途中、門司市より両親に書き送った最後の書簡）

昭和十九年六月二十日午前八時

父上
母上様、弟へ。　　門司にて　徳郎

何もかもとつぜんで、しかもいっさいがほんの些細な運命の皮肉からこういうことになりました、しかし別に驚いてもおりません。克郎(弟)に一時間なりとも会うことのできたのはせめてもでした。実際はすでにその前日いなくなっているはずでした。そうしたら誰にも会えなかったのです。

いろいろの都合で、十日あまり門司の塵と煙とに燻み切ったみすぼらしい街の、瓦の荒れた旅籠屋に暮らしました。新聞で御承知のことと思いますが、とくに印象的な思い出の数々を残して、いよいよ極めて近日中に出帆します。電話で知っていれば家へも話が通じますし、したがってあるいは会えたかも知れなかったのでしたが、これも運命です。

これから行先はもちろんわかりません。もちろん最も激戦地であることは間違いないと思います。お便りもおそらくは当分（といってもかなり長い間）全然できないと思われます。偶然高村兄（当時一高理科三年生）も同行し、すぐ隣の車に乗っています。何かにつけ私達はお互いに心を慰め、心を豊かにすることができるでしょう。

最も伴侶にしたかった本を手元に持っていなかったのは残念ですがいたしかたありません。それでも幾冊かを携えて来ました。

出発に当たっては後に残る先輩同僚の戦友が、いよいよ営門を出る間際まで何くれとなく細かい面倒を見てくれました。精神的にはもちろん、物質的経済的にも餞別を送ってくれました。涙を禁じ得ませんでした。それはあたかも入隊する時寮生（一高寮生）が示してくれた好意と同じでした。私はどうしたらそういう人びとに報いることができるか、心もとないかぎりです。学校の級友などと違ってほんのかりそめの縁で集まった戦友は、中には住所も何も知らない人がほとんどです。おそらくそういう人びととは、このまま、それっきりになってしまうのが大部分ではないかと思いますが、あの人達が示してくれたささやかではあるけれど美しく、純粋な好意の数々は一生涯忘れることができないでしょう。（中略）

辻村教授と安倍校長の両先生には別にお便りを出しておきました。一年から終始受持であり、しかも山岳部長である荒又先生と、一中の当山先生とにはお便りする余裕を得ませんでした。おりがあったらよろしくお伝えください。モリス氏にはいずれまた会えること

と思いますが、万一のことがあったら（その確率は必ずしも小さくないのですが）、かくなれる顛末と、その後の自分がいかに在りしかを伝えてください。それとともに氏にあてた手紙（克郎が持っています）を渡してください。もし氏が来朝しなかったら、氏の自宅の所番地が、最近の「山日記」の住所欄に書いてあります。また氏から預かったものの処理についても克郎に示しておきました。

今の自分は心中必ずしも落着きを得ません。いっさいが納得がいかず肯定ができないからです。いやしくも一個の、しかもある人格をもった「人間」が、その意志も行為もいっさいが無視されて、尊重されることなく、ある一個のわけもわからない他人のちょっとした脳細胞の気まぐれな働きの函数となって左右されることほど無意味なことがあるでしょうか。自分はどんな所へいっても将棋の駒のようにはなりたくないと思います。ともかく早く教室へ還って本来の使命に邁進したい念せつなるものがあります。こうやっているとじりじり刻みに奪われていく青春をかぎりなく惜しむ気がしてなりません。自分がこれからしようとしていた仕事は、日本人の中にはもちろんやろうという者が一人もいないといってよいくらいの仕事なのです。しかも条件に恵まれている点において、世界中にもそうざらにないくらいじゃないかと思っています。自分はもちろん日本の国威を輝かすのが目的でやるのではありませんけれども、しかしその結果として、戦に勝って島を占領したり、都市を占領したりするよりも、どれほど真に国威を輝かすことになるか、はかり知れないものがあることを信じております。

自分をこう進ましめたのは、いうまでもなく辻村先生の存在があずかって力ありますが、モリス氏の存在を除くことができません。氏は自分に、真に人間たるものが、人類たるものが何を為すべきかということを教えてくれました。また学問なるものの何物たるかを教えてくれたような気がします。私はある夜、チベットの壁画を掛けた一室で、チベットの銀の匙で紅茶をかきまわしながら、氏が私に語った“Devote yourself to Science.”という言葉を忘れることができません。現在のこうした状態が続く時、祖国の将来のことが案ぜられてなりません。いかに日本が特殊な国だからとみずから信じても、歴史の規定性からまぬがれることはできないと思います。あたかも自分の身体は特別誂えだから、現代生理学の法則には従わないのだと誇示するのと同じに滑稽なことです。現在のような情勢が

（戦争には勝つものと仮定しても）、長い将来においていかなる状態を生むか、考えなければならないことです。およそ何びとが真の愛国者であったかは歴史がきめてくれるでしょう。自分の場合、たとえ現在勲章などをもらわなくとも、歴史の永遠性の中に愛国者たる価値を、もし付されたならば、それで心から満足します。もし私が「死んだ」というしらせがあったなら、自分の意志に反して敵弾に殪れたのではないと信じてください。戦闘惨烈を極めいよいよという時は、自分みずから命を断つことを肯定してみずからの手で果たすつもりでいます。しかしそういうことのないことを信じたいと思います。だがまた、あんがい、はかない望みでないかという気もします。

克郎には十分勉強さしてやってください。委しておいて大丈夫のように思います。一冊の本を得るにも思い悩んで頭を抱くような寂しい目にあわしたくないという気がしてなりません。実際考えれば考えるほど可哀想に感じます。勉強するのには現下の状態があまりにも苛酷であり不自由であることなぞ、不幸に思います。先日最後の面会に来た時、将校室で、将校立会のもとに、私が事務的にいろいろのことを語ったのでしたが、それを下を向いて克明に筆記しながら、何だか涙ぐんでいたようでした。可哀想でなりませんでした。

ずいぶんとりとめもないことを記しましたが、意のあるところを彼らにも伝えてください。もう夕方になりました。準備にかからねばなりません。では元気でいって来ます。お体を大切にしてください。こちらのことは心配なく。爪と頭髪とは出発の間際連隊へ残してきました。

克郎へ。

いろいろのことは別に記しておいた。今日最後の散髪に引率外出があった際、近くの古本屋で掘出物を得た。楽しみにして持っていく。

左に書名を記しておく。

			（定価・円）
一、ゲーテ・シルレル往復書簡集	桜井菊書店	地栄一訳	五・五〇
一、文学と文化	鮎書房	高橋健二著	二・八〇
重複一、形成的自覚	弘文堂	木村素衛著	二・五〇
一、最近世界史年表	三省堂		一・五〇

花岡俊輔　昭和十六年東北大学法学部卒業。昭和十七年一月十日入営。昭和十九年六月二十五日ニューギニヤ・ビアク島天水山にて戦死。二十八歳。

十日の入営日に野球場のスタンドで、それまで着ていた私物の服を脱ぎ、軍服に着替えた時、内地部隊には支給されない防寒襦袢や袴下が渡ったので、行く先は北支あたりだろうとの大よその見当はついていたが、いよいよ出発が迫ると、やっぱり生活ががらりと変わって、全く落ち着かぬ環境にいたせいもあって、誰もかも内心は多少の不安があり、さらに両親兄弟等にこの次は何時会えるだろうという淋しさが先に立ち何とかして最後にもう一度面会がないものかとそればかりを望みにしていた。

寺前隊六十名の中に静岡高等学校で一年下で、弓道部生活を共にした、渡辺嘉之がいたことは何よりの力強さであった。渡辺は学校時代は何も目立たぬ典型的なおとなしい生徒であったが、この頃は人が変わったようにしっかりして、出しゃばることはないが、一旦弁じ出すと敬服に足るしっかりした話をするので、隊中の信望を得ていた。その他にまず親交を結んだのは佐山明正、神楽坂の洋服屋さんの長男で実に善良な、心から信頼するに足る人間であった。この頃は毎日軍服その他に名前を縫いつけたり、襟布や、ボタンをつけたり、二等兵の階級章を縫いつけたり、毎日馴れぬ針仕事を僅かの時間に急がされてするのがなかなか大仕事だったが、佐山はお得意の腕を振るってたいてい僕の分も引き受けてくれた。

その他に池田利三郎という、神田の与太公がいたが、なかなか侠気があって、面白い所があるので、これを一つ手なずけてやろうと思ったが、この奴どうして大変なきかん坊で、隊中の者をちょいちょい困らせていた。しかし一月、二月経つうちに僕と大変に気が合って、いつかとても仲良しになってしまった。

隊員は会社員も多いが、商人もあり、職人もあり、ひどいのは監獄部屋で一年暮らしたという男もあり、気のきかぬ百姓も混じり、玉石混淆素質の上下のはなはだしさはお話しにならなかった。これを四コ隊に分け、僕が第一分隊長、渡辺二分隊長、佐山第三分隊長（四分隊は忘れた）、初年兵受領員たる楠野曹長、徳長軍曹が引率し、各分隊合わして数百名（あるいは千人位だったかと思う）が北支に渡ることになった。

二十二日早朝起床、青年会館前に整列、長蛇の行軍を起こして品川に向かった。青年会館前には数百名の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com